

北九州市立大学グローバル人材育成事業における 1年生向けプログラムの成果と課題 —平成27年度入学生のプログラム参加状況および TOEIC スコアの分析—

西出 崇*・永末 康介

1. はじめに

北九州市立大学では、文部科学省のグローバル人材育成推進事業の採択を受けて、平成24年度から体系的なグローバル人材育成のためのプログラム「Kitakyushu Global Pioneers (以下、KGP)」を展開している¹。本稿では、このKGPにおいて1年生向けプログラムとして設置されているStart Up Program (以下、SUP)の平成27年度の成果と課題について、TOEICスコアやプログラムへの学生の参加状況、プログラムに対する学生の意識や態度などから分析する。過年度のSUPの成果と課題についても分析を行っているが(西出・永末, 2015; 西出・永末, 2016)、データの不足からSUPおよびKGPに対する学生の意識などは十分に分析できておらず、TOEICスコアの分析が中心となっていた。これを踏まえて、平成27年度は探索的にはあるが、プログラムの節目ごとにKGPの参加学生に対して意識調査を実施した。このデータに基づいて、ここではTOEICスコアの分析に加えてプログラムに参加した理由や、途中で離脱する要因などについて分析を行う。特に、SUPは開始直後には数多くの学生が参加するものの、時間の経過とともに途中で離脱してしまう者が多いことが課題となっており、途中で履修を取りやめる要因を探るための分析を重点的に行う。

以下では、まずSUPへの参加者数を整理したうえで、プログラムのガイダンス

* 京都外国語大学

¹ プログラムの内容や詳細については、KGPのWebサイト (<http://international.kitakyu-u.ac.jp/kgp/>) および、西出・永末 (2015) などを参照されたい。

の際に非履修者も含めた新入生全員を対象として実施したアンケートのデータを検討する。続いて、学年全体の TOEIC スコアの分布や TOEIC スコアに対する SUP 履修の効果について、特に TOEIC スコアの伸びに注目して検討する。最後に、課題となっている SUP の途中で離脱する学生の特徴について、履修者を対象にプログラムの節目ごとに実施した調査のデータから検討する。以上の分析を踏まえて、最後に今後の SUP および KGP の内容や構造の改善のあり方について若干の考察を行う。

2. SUP に参加する学生の特徴

KGP では、1 年生を対象に SUP と呼ばれる講座を提供している。SUP は 2 年生以降の本格的な KGP の入り口となるプログラムであるが、KGP の修了要件には含まれず、履修のための条件や単位、修了の認定などない任意参加のプログラムである。現在の SUP の主な内容は、2 年生以降の KGP を履修するための英語力の基礎を養成すること、なかでも履修の要件として課している TOEIC スコアを達成することに焦点をあてたものとなっている。したがって、既に履修要件の TOEIC スコアを満たしている学生は SUP を履修する必要はない。だが、大半の学生は入学時に TOEIC 受験の経験がないことや、TOEIC スコアを達成していたとしても、さらなるスコアの向上を目指し、2 年生以降の KGP 履修に向けて SUP に参加している。そのため、任意参加のプログラムではあるが、実質的には 2 年生以降の本格的な KGP への第 1 歩であり、参加者の母数となっている。

KGP の対象となる北九州市立大学北方キャンパス（文社系学部）への平成 27 年度の入学者は約 1200 名であるが、そのうち 3 分の 1 以上の約 450 名が SUP への参加申請を行っている。参加申請を行った学生の全てが継続的に SUP の講座に参加し、最後まで履修し続けるわけではないが、単位認定もない任意参加のプログラムであることを考えれば、新入生における KGP への関心の高さがうかがえる。

では、どのような学生が KGP に関心を持ち、SUP に参加するのだろうか。それが本節の主要な関心である。これまでも各年度の SUP の成果や課題については分析しているが（西出・永末, 2015; 西出・永末, 2016）、データが十分にそろっていなかったため参加学生の特徴や実態を十分に検討、把握することができていなかった。これを踏まえて、平成 27 年度には入学時から節目ごとに参加学生に対し

て調査を実施している。初めて実施する調査であり、今後調査内容を再検討する必要があるかもしれないが、プログラム参加学生の特徴や現状を明らかにし、プログラムの課題や今後の改善点などを議論する出発点にはなるだろう。

ところで、SUPは先述のように任意参加のプログラムであるため、通常の授業とは異なりプログラムへの参加や修了の定義が曖昧である。そこで、分析に先立ってプログラムへの「参加」についてあらかじめ整理しておく。まず、プログラムに参加するためには参加申請を行う必要があるが、ここでは参加申請書を提出した学生を「申請者」とする。ただし、この参加申請はクラス分けや講座の時間割設定のために参加人数を把握することが主目的であるため、参加申請を行わなくてもSUPに参加することは可能である。次に、申請者には事務局からレベル別に参加可能なクラスの時間割候補が示され、学生はその時間割のうち都合のよい曜日時限の講座を選んで受講する。クラスへの登録は、出席をもって行われる。そこで、1度でもSUPの講座に出席しクラスに登録された学生を「履修者」とする。そして、SUP参加者に対して実施しているTOEICの受験料補助の受給基準である講座の欠席回数が2回以下の学生を、ここでは「修了者」とする。

これを踏まえて、SUPの参加者の特徴を見ていく。まず、学部・学群（以下、学部）、学科・学類（以下、学科）、および性別ごとのSUPの履修者数を表1に示す。約450名の申請者数に対して実際の履修者数は80名ほど減少しているが、それでも全体では3割以上の学生がSUPを履修していることがわかる。学部・学科別に見ると、外国語学部の履修者が他を引き離して多く、中でも国際関係学科で履修者の割合が高くなっている。グローバル人材育成プログラムの内容を考えれば、外国語学部の履修が多いことは当然であるといえる。次に履修者が多いのは経済学部と文学部で、両学部とも3割弱の学生が履修している。経済学部については、経済学科、経営情報学科ともに同じくらいの履修率であるが、文学部では比較文化学科の履修者の多さが目立つ。性別では、男性よりも女性の方が履修の割合が高い。

【表 1】学部・学科別の SUP 履修者数

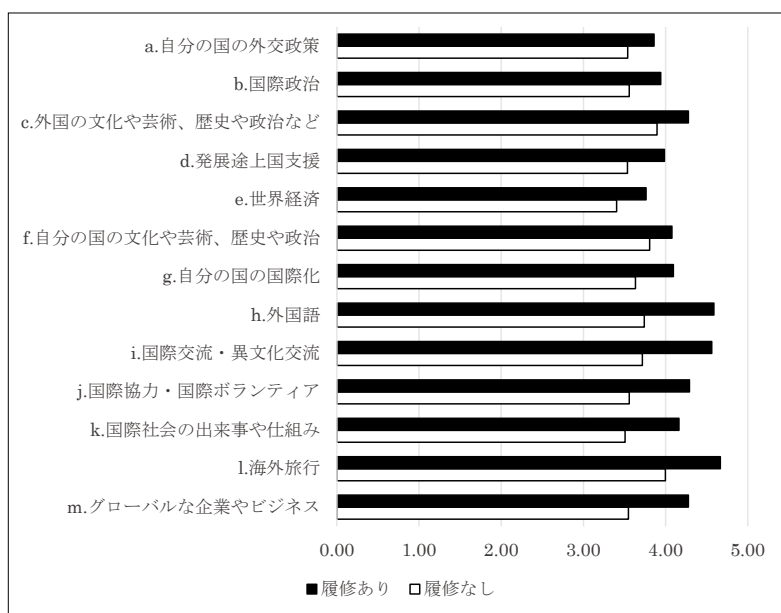
学部・学科	履修者数 (割合)
外国語学部	191 (69.5%)
英米学科	70 (59.3%)
中国学科	29 (49.2%)
国際関係学科	92 (93.9%)
経済学部	86 (28.9%)
経済学科	41 (28.1%)
経営情報学科	45 (29.6%)
文学部	67 (27.6%)
比較文化学科	59 (39.1%)
人間関係学科	8 (8.7%)
法学部	25 (9.4%)
法律学科	20 (10.8%)
政策科学科	5 (6.1%)
地域創生学群	4 (4.4%)
地域創生学類	4 (4.4%)
性別	
男	102 (21.2%)
女	271 (39.2%)
全体	373 (31.8%)

単位：人

次に、SUP を履修する学生の特徴について検討する。ここでは、新入生オリエンテーションにおける KGP のガイダンスで実施した調査を用い、SUP の履修者と非履修者の比較から履修者の特徴を見る。調査の実施方法や回収率については、本調査の入学動機に関する項目を分析した西出・山崎・浅羽（2015）を参照されたい。新入生向けのガイダンスにおいて実施した調査であるため、調査対象は新入生全体であり、回答に際しては学籍番号の記入を求めたため、SUP 履修者を特定することが可能となり、履修者と非履修者を比較することができる。調査項目は、「グローバル」に関連する事柄に対する興味や、グローバル社会と自分自身との関係の認識、入学動機などである。

はじめに、「グローバル」に関連する興味・関心について集計する。調査では、「自分の国の外交政策」「国際政治」「グローバルな企業やビジネス」など、一般にグローバル社会に関連しそうな項目を挙げ、それぞれについて「とても興味がある」から「まったく興味がない」までの 5 段階でたずねている。この項目について、「とても

興味がある」から「まったく興味がない」まで順に5点から1点を割り当て、SUPの履修者と非履修者でその平均得点を比較した(図1)。集計の結果を見ると、予想されるとおり、いずれの項目でもSUPを履修している者の方が非履修者よりも、これらの項目に対する関心が高いことが見て取れる²。各項目について両者の差に注目すると、平均得点の差だけでいえば「外国語」「国際交流・異文化交流」「グローバルな企業やビジネス」「国際協力・国際ボランティア」などで履修者と非履修者で興味の度合いの差が大きいようである。

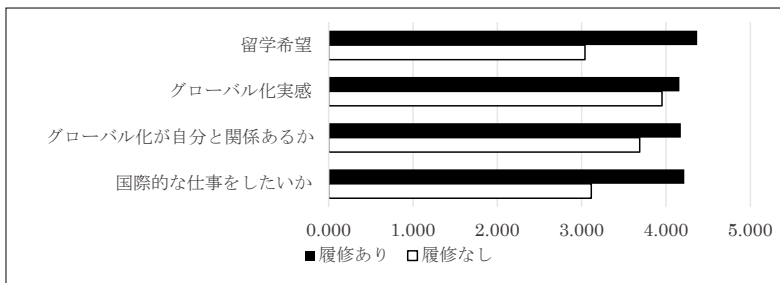


【図1】SUP履修者と非履修者の「グローバル」に関する興味の比較

次に、留学希望や将来の見通しなどについても同様に集計する(図2)。SUPの履修の有無で比較すると、「留学希望」や「国際的な仕事をしたいか」などの項目で比較的大きな差が見られる。KGPは、留学を希望する学生や将来の進路として「国

² 順序尺度の平均を求めることに問題がないわけではないが、簡便に比較するためにここでは平均を示している。t検定によって各項目の履修者と非履修者の差を検討したところ、いずれも有意な差が認められた。

「国際的な仕事」に就くことに関心がある学生が参加する傾向があるようである。他方で、グローバル化の実感や履修の有無によって大きな差は見られず、比較的高い水準にある。どのようにグローバル化を実感しているのかをこの調査から知ることはできないが、多くの学生が社会のグローバル化を感じているのは確かなようである。しかし、そうした認識が KGP への参加とはあまり関係していないようである。どちらかといえば、そのグローバル化が自分自身に関係していると感じるかどうかが、SUP 履修者と非履修者の違いのようである。



【図 2】 SUP 履修者と非履修者の比較（留学希望など）

では、これらの SUP 履修者と非履修者の違いを踏まえて、どのような興味・関心やグローバル化に対する認識、将来の進路に対する考え方が、SUP を履修するかどうかをどのように左右しているのだろうか。この点について、ここでは SUP の履修の有無を目的変数とし、これらの興味・関心やグローバル化に対する認識などを説明変数としたロジスティック回帰分析で検討する（表 2）。

まず注目されるのは、統制変数としてモデルに投入した性別である。男性よりも女性の方が SUP を履修する確率がかなり高くなっていることがうかがえる。モデルには学部・学科を説明変数に含めていないが、外国語学部の女性の比率が高く、同学部における SUP 履修の割合が高いことが関係していると考えられる。そもそもなぜ外国語学部の女性比率が高いのかという点は本質的な疑問として残るものの、ここではひとまず女性の方が KGP に関心を持つ傾向がある点を把握するにとどめる。

次に、「グローバル」に関連した興味・関心について検討する。まず説明変数として、「グローバル」に関連した興味・関心のみを投入した「モデル 1」について見ると、

【表2】SUP履修の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析

	モデル1			モデル2		
	B	標準誤差	exp(B)	B	標準誤差	exp(B)
性別(男性ダミー)	-0.668	0.175	0.513 **	-0.686	0.182	0.503 **
グローバルに関連する興味・関心						
a. 自分の国の外交政策	0.181	0.132	1.198	0.218	0.139	1.243
b. 国際政治	0.027	0.142	1.028	-0.063	0.150	0.939
c. 外国の文化や芸術、歴史や政治など	-0.078	0.119	0.925	-0.102	0.125	0.903
d. 発展途上国支援	0.023	0.115	1.023	-0.021	0.120	0.979
e. 世界経済	0.041	0.114	1.042	0.072	0.119	1.075
f. 自分の国の文化や芸術、歴史や政治	0.081	0.117	1.084	0.200	0.122	1.221
g. 自分の国の国際化	-0.292	0.123	0.747 *	-0.300	0.129	0.741 *
h. 外国語	0.584	0.131	1.793 **	0.356	0.140	1.427 *
i. 国際交流・異文化交流	0.409	0.161	1.506 *	0.130	0.167	1.139
j. 国際協力・国際ボランティア	0.071	0.139	1.074	0.097	0.146	1.102
k. 国際社会の出来事や仕組み	0.231	0.124	1.260 +	0.165	0.130	1.179
l. 海外旅行	0.154	0.117	1.167	-0.202	0.134	0.817
m. グローバルな企業やビジネス	0.265	0.110	1.304 *	0.191	0.119	1.211
留学希望				0.560	0.099	1.750 **
グローバル化実感				0.034	0.120	1.035
グローバル化が自分と関係あるか				0.203	0.112	1.226 +
国際的な仕事をしたいか				0.270	0.115	1.310 *
疑似R ² (McFadden)	0.210			0.264		
AIC	1041.803			979.916		
N	1004			1004		

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

「外国語」「国際交流・異文化交流」「グローバルな企業やビジネス」「国際社会の出来事や仕組み」といった方面に興味のある学生が、SUPを履修する確率が高いようである。調査で挙げた他の項目との兼ね合いでいえば、途上国支援や国際政治といった領域よりも、ビジネスや国際交流といった関心を持つ学生が参加しやすいプログラムとなっていることがうかがえる。また、「外国語」への関心も参加を大きく左右する重要な要因となっているようである。これらに対して、「自分の国の国際化」に関心がある学生は、SUPを履修しない傾向にあることは興味深い。「自分の国の国際化」として何がイメージされているのかはわからないが、KGPがこのような方面に関心を持つ学生を、むしろ遠ざけている可能性があることは、新入生のKGPの捉え方として注意を要する点かもしれない。

興味・関心に加えて、留学希望やグローバル化への認識、国際的な職業への就職希望を説明変数として投入して分析したものが「モデル2」である。これらの変数を投入すると、モデルの相対的な当てはまりの良さは改善するが、先ほどの興味・関心のいくつかの項目では影響が見えなくなり、「外国語」と「自分の国の国際化」

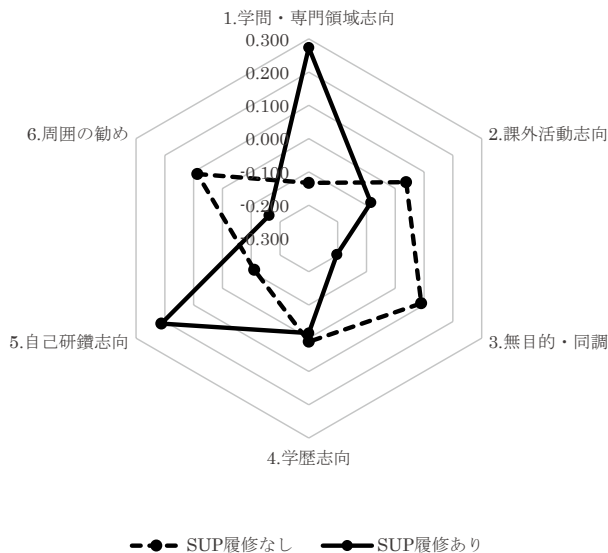
だけが有意な影響を及ぼす変数として残る。他方で、新たに投入した変数については、「留学希望」「グローバル化が自分に関係ある」「国際的な仕事をしたい」が SUP 履修の確率を有意に押し上げるようである。内容的に考えれば、「グローバルな企業やビジネス」への関心の影響が見えなくなったのは、このような関心が将来的に「国際的な仕事」に就きたいという目標があつてのことだと考えられる。グローバル化に対する認識については、グローバル化をただ実感するだけではなく、グローバル化が自分自身に関係することであるとの認識を持つことが、KGP への参加を促すようである。

最後に、大学への入学動機の点からも SUP 履修者の特徴を検討しておく。調査では、大学進学動機として 24 の項目を挙げ、それぞれについて自分にあてはまるかどうかを 5 段階で回答してもらった。このデータについては、既に西出・山崎・浅羽 (2015) で因子分析を適用して 6 つの因子を析出し、学部・学科の特徴を検討している。ここでは、この因子分析の結果を用いて SUP 履修者の特徴を検討する。因子分析によって析出されたのは、第 1 因子から順に「1. 学問・専門領域志向」「2. 課外活動志向」「3. 無目的・同調」「4. 学歴志向」「5. 自己研鑽志向」「6. 周囲の勧め」の 6 つの因子である。この各因子の因子得点の平均を SUP の履修の有無で比較することで、履修者の特徴を見る (図 3)。

図からは、明らかに SUP の履修者と非履修者では入学動機の分布が大きく異なっていることが分かる。履修者の特徴を見ると、まず「1. 学問・専門領域志向」や「5. 自己研鑽志向」が高いことが見て取れる。前者は、明確な目的性のある学問的、専門的な学びの因子であり、後者は、目的は抽象的ではあるものの、大学で何かを学びたいという因子である。この両者の因子得点が高いことから、SUP を履修する学生は相対的に学習意欲が高い学生であることがうかがえる。他方で、「3. 無目的・同調」や「6. 周囲の勧め」といった、消極的な大学進学動機の因子得点は低い。つまり、SUP の履修者は主体的で学習意欲が高く、KGP は初期段階において意欲のある新入生を十分に集めることができているといえる。しかし SUP では、履修をしたものの途中で離脱する学生がかなり多い。この点は後に検討するが、相対的に学習意欲が高い学生の参加を数多く集めることに成功しているにも関わらず、途中で離脱する者が多いということは、KGP のスタートアップとして TOEIC スコアの向上にやや偏重した現状の SUP に課題があることは間違いないだろう。

以上が、KGP の入り口となる SUP 履修者の特徴である。途中で離脱する者が多

北九州市立大学グローバル人材育成事業における1年生向けプログラムの成果と課題
 —平成27年度入学生のプログラム参加状況およびTOEICスコアの分析—



【図3】 SUP 履修者と非履修者の進学動機の比較

いなどの課題があるとはいえ、総じていえばKGPが示すグローバル人材育成のコンセプトと、参加する学生の興味・関心の方向は概ね一致しており、相対的に学習意欲が高く目的意識を持った学生が参加しているといえる。したがって、新入生に対するKGPの情報提供や参加者募集の段階では一定の成功を収めているといっ

3. SUP と TOEIC スコア

次に、SUPの主な目的であるTOEICスコアの向上について見る。SUPのTOEICスコアへの影響を検討する前に、北九州市立大学北方キャンパスにおける平成27年度新生全体の同年度実施のTOEICスコアの状況について概観する。北九州市立大学では、1・2年生の基礎教育を担当する基盤教育センターの必修の英語教育科目においてTOEICの受験を義務付けており、英語教育科目の単位認定に利用されたり成績に組み入れられたりする。そのため、KGPへの参加の有無に関わらず、

ほとんどの1・2年生がTOEICを受験する³。

まず各学期のTOEICスコアおよび1学期から2学期にかけてのTOEICスコアの変化（以下、TOEICスコアの伸び）を学部・学科ごとに集計する（表3）。学期中にTOEICを複数回受験する学生もいるが、その場合は各学期の最高点を集計に用いる。またTOEICスコアの伸びについては、2学期から1学期のTOEICスコアを引いた値である⁴。

全体のTOEICスコアの平均は、1学期が417.5ポイント、2学期が442.2ポイントとなっているが、英語力の高い外国語学部が存在することから、学部・学科間の差は比較的大きい。最もTOEICスコアの平均が高い外国語学部では、1学期の段階で平均が550ポイントを超えている。なかでも英米学科は他の学科を引き離してスコアが高く、1学期で600ポイントを超えている。続いてスコアが高いのは国際関係学科で約530ポイント、中国学科が約485ポイントと続く。外国語学部に次いで平均スコアが高いのは文学部で約415ポイントであるが、学科別に見ると比較文化学科の方が人間関係学科よりも高い。経済学部と法学部は、いずれも平均スコアは概ね350ポイントで同程度である。

2学期のTOEICスコアの平均を見ると、いずれの学部・学科も1学期よりはスコアが高くなっているように見える。2学期から1学期のTOEICスコアを引いた「伸び」を見ると、単純な数値ではいずれも正の値となっていることから、少なくとも平均的なスコアは年間で低下してはいないようである。ただし、学年全体における平均的なスコアの伸び幅は概ね25ポイント程度であるが、TOEICを実施している国際ビジネスコミュニケーション協会によれば、同じ人が同じテストを受験しても25ポイント程度のばらつきが生じる可能性があるとしており、受験そのものへの慣れなどを考慮すればTOEICスコアが実質的に伸びていると直ちに判断することはできないだろう。TOEICスコアの伸びの幅を学部・学科ごとに見ると、国際関係学科の約10ポイントから政策科学科の約40ポイントまで幅があるが、伸び幅

³ ただし、地域創生学群についてはこれらの英語教育科目が必修とはなっていないため、TOEIC受験についても義務ではない。そのため、TOEICを受験する地域創生学群の学生は少ない。また、KGPへの参加も非常に少ないことから、以降の分析では地域創生学群の学生は除外する。

⁴ 1学期から2学期にかけてのTOEICスコアの伸びの平均が、1学期の平均と2学期の平均の差と一致しないのは、いずれかの学期にTOEICスコアがない学生がおり、伸びの平均の計算には両学期とも受験した学生だけを集計しているためである。

の大きさは平均的なTOEIC水準が高い学部・学科ほど小さい傾向にあるようである。過年度のTOEICスコアの分析でも、初期のTOEICスコアが高いほど伸び幅が小さくなるのが観察されているが、この点は後に検討する。

【表3】学部・学科ごとのTOEICスコアおよび年間の伸び

	1学期		2学期		伸び (2学期 - 1学期)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
外国語学部	559.5	126.6	572.4	121.5	17.2	67.2
英米学科	619.2	135.1	634.7	119.2	25.2	65.1
中国学科	485.0	91.4	509.4	102.9	16.7	75.6
国際関係学科	530.9	100.4	546.3	105.4	9.7	64.4
経済学部	353.5	100.0	382.5	96.0	27.6	67.0
経済学科	347.3	99.4	383.3	87.8	36.3	68.7
経営情報学科	359.5	100.6	381.8	103.0	19.9	64.8
文学部	414.5	110.7	435.6	106.8	22.8	72.4
比較文化学科	436.4	111.1	455.5	104.4	17.8	73.3
人間関係学科	378.2	100.6	404.2	103.3	31.1	70.5
法学部	352.4	96.2	388.3	88.7	36.5	70.3
法律学科	355.0	93.2	390.1	89.5	34.5	70.5
政策科学科	346.4	103.0	384.2	87.5	40.9	70.0
全体	417.5	137.6	442.2	128.5	26.2	69.4

続いて、SUPの履修とTOEICスコアの関係を見る。表4は、SUPの履修状況別に各学期のTOEICスコアおよび年間の伸びの平均を集計したものである。1学期ないしは2学期のいずれかのSUPを履修した学生と履修していない学生で1学期のTOEICスコアの平均を比較すると、履修した者のTOEICスコア平均が約500ポイントに対して、非履修者では約370ポイントと低く、両者の差をt検定で検討すると有意な差が認められる⁵ ($t=15.321$, $df=667.841$, $p<0.000$)。このことから、SUPに参加しているのは当初から英語力が相対的に高い学生であることがうかがえる。しかし、1学期から2学期にかけてのTOEICスコアの変化を見ると、SUPの非履修者の伸び幅が31.2ポイントであるのに対して履修者では17.2ポイントとなり、非履修者の伸び幅の方が大きい⁶。つまりSUPを履修した学生は、平均的な

⁵ 以降、特に断りがなければ5%水準で帰無仮説が棄却された場合に、統計的に有意であると判断する。

⁶ SUPの履修者と非履修者のTOEICスコアの伸びの平均をt検定で検討すると、有意な差が認められる ($t=-3.023$, $df=965$, $p<0.003$)。

TOEIC スコアの水準は非履修者と比べて高いものの、年間を通した伸び幅は非履修者よりも小さい。

後で詳細に検討するが、SUP では履修しても最後まで講座に出席せず、途中でプログラムを離脱する者がかなりいる。そこで、1 学期の途中で SUP の受講をやめた者（未修了）、1 学期は最後まで受講したが 2 学期は受講していない、もしくは途中で離脱した者（1 学期のみ修了）、両学期ともに最後まで受講した者（1 学期・2 学期いずれも修了）で、SUP と TOEIC スコアとの関係を見る⁷。「未修了」「1 学期のみ修了」「いずれも修了」の 3 つの群を比べると、最後まで受講した群ほど 1 学期の初期の TOEIC スコアも 2 学期の TOEIC スコアも高い傾向が見える。しかし、TOEIC スコアの伸び幅の平均を見るとほとんど差がなく、数値上は「未修了」の群が最も大きい値となっている。

数値だけを単純に見れば、1 学期から 2 学期にかけての TOEIC スコアの伸びは、SUP を受講していない学生ほど大きく、受講者についても、最後まで受講した者も途中でプログラムの受講をやめた者も伸び幅はほとんど変わらない。この点を平成 26 年度入学生の状況（西出・永末，2016）と比較すると、昨年度は SUP を受講する者ほど伸び幅が大きい傾向にあり、最後まで受講をつづけた修了者では年間の TOEIC スコアの伸びの平均が 58.8 ポイントであったことから、平成 27 年度の SUP はスコアを伸ばす効果が昨年度よりも小さかった可能性がある。SUP の英語力向上のための講座は、外部の事業者へ委託して実施しているが、平成 27 年度は

【表 4】 SUP の履修状況と TOEIC スコアおよび年間の伸びの関係

	1 学期			2 学期			伸び		
	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N	平均	標準偏差	N
全体	417.5	137.5	1026	442.2	128.5	1001	26.2	69.4	967

SUP 履修状況									
履修なし	372.3	117.2	663	402.1	109.9	648	31.2	70.6	621
履修あり	500.3	133.3	363	515.7	127.5	353	17.2	66.0	346

SUP 履修者									
未修了	461.3	112.2	120	482.9	116.7	117	18.6	71.7	111
1 学期のみ修了	495.5	129.0	157	503.9	115.4	151	14.3	62.0	150
1 学期・2 学期いずれも修了	568.1	143.6	80	582.0	141.3	79	16.4	61.0	79

⁷ 2 学期の SUP 修了者の大半は 1 学期も SUP を修了している。1 学期は修了せず 2 学期は修了した者もいるが、6 名とごくわずかであるため集計はしない。

委託事業者の変更があったこと、予算の制約から講師が常駐ではなくなったことなど、実施体制が大きく変わったことが影響していると考えられる。SUPの実施体制や内容とTOEICスコアの伸びとの関係については、今年度の課題として検証と改善が求められる点である。

ここまでは、SUPへの参加状況によって群分けし、そのTOEICスコアや伸びの平均からSUPの受講とTOEICスコアとの関係を検討してきたが、平成27年度についてはSUPの受講によって目に見えてTOEICスコアが向上していることを見出すことは難しいことを示した。では、今年度のSUPは効果がなかったのだろうか。これまでに行った過年度のSUPの分析や先行研究などでも指摘されているとおり(土肥, 2006; 土肥・柳瀬, 2009; 磯田・田頭, 2011; 西出・永末, 2015; 西出・永末, 2016)、TOEICスコアの伸びは当初のスコアの水準が高いほど小さくなる傾向があることから、伸びはTOEICスコアの水準との兼ね合いで見なければならない。

表4でも、SUPを受講する者の方が1学期の段階で大幅にTOEICスコアが高く、履修者のなかでも最後まで受講を続ける修了者群のほうが平均的なTOEICスコアの水準が高いことから、TOEICスコアの水準の高さが、履修者の伸び幅を目減りさせている可能性がある。TOEICスコアの伸び幅の値そのものが小さい点には十分に注意を払う必要はあるが、ここではそれぞれの学生のTOEICスコアの水準を考慮したうえで、SUPのTOEICスコア向上に対する効果を検証する。

分析は、TOEICスコアの伸びを目的変数とし、SUPの履修状況、当初のTOEICスコア水準、性別、所属学科、SUPのクラスのレベルを説明変数とした重回帰分析によって行う。SUPの履修状況は、年間を通してのSUPへの出席回数を用いる。したがって、SUPを履修していない者については出席回数が0回となる。当初のTOEICスコア水準は、1学期のTOEICスコアを用いる。ここで集計している1学期のTOEICスコアは、多くの場合7月に入ってからからの団体受験のスコアである。そのため厳密に入学直後の初期値というわけではないが、ほとんどの学生が初めてのTOEIC受験であることからTOEICスコアの初期値とみなす。クラスのレベルは、レベルが低い順に「基礎」「初級」「中級」「上級」に分かれる。上級クラスは通常のSUPの講座とは異なるクラスであり、履修者もごく一部の上位層である点は、分析結果を見る際に注意しなければならない。

【表 5】 TOEIC スコアの伸びを左右する要因

	モデル 1	モデル 2	モデル 3	モデル 4	モデル 5
	β	β	β	β	β
性別 (男性ダミー)	0.201 **	0.130 *	0.144 *	0.185	0.225 +
SUP 出席回数	-0.058 +	0.138 **	0.117 **	0.141 **	0.150 **
1 学期 TOEIC スコア		-0.417 **	-0.546 **	-0.540 **	-0.594 **
学科 (Ref. 比較文化学科)					
英米学科			0.708 **		0.276
中国学科			0.149		0.089
国際関係学科			0.142		-0.141
経済学科			-0.123		-0.170
経営情報学科			-0.282 *		-0.308
人間関係学科			-0.014		-0.777 *
法律学科			-0.073		0.082
政策科学科			-0.016		0.063
レベル (Ref. 初級)					
基礎				-0.463 **	-0.350 +
中級				0.481 **	0.386 **
上級				0.723	0.464
R ²	0.015	0.147	0.191	0.173	0.206
Adj. R ²	0.013	0.144	0.181	0.158	0.172
N	967	967	967	343	343

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

表 5 に、説明変数が異なる 5 つのモデルの分析結果として、標準化偏回帰係数および決定係数を示す。なお 5 つのモデルは、いずれも TOEIC スコアの伸びを予測するのに有効なものとなっている。モデル 1 は統制変数として投入する性別以外に SUP への出席回数と切片のみを投入したモデルである。予測に有効なモデルではあるが、決定係数の値はかなり小さい。TOEIC スコアの伸びに対して SUP の出席回数は 10% 水準で有意な影響がみられるが、係数は負の値である。したがって、出席回数が増えるほど伸びが減少するといえる。先の分析では SUP 履修者よりも非履修者の方が伸びの平均が大きいことを示したが、この結果と一致する。しかし、TOEIC スコアの伸び幅は当初の TOEIC スコアの水準によって左右される。そこで次に、モデル 1 に 1 学期の TOEIC スコアを加えたモデル 2 を検討する。

モデル 2 はモデル 1 と比較すると決定係数が大きく改善していることから、当初の TOEIC スコアの水準は TOEIC スコアの伸びをかなり左右する要因であることがうかがえる。新たに投入した 1 学期の TOEIC スコアは伸びに有意な影響を及ぼしており、係数は負の値となっている。したがって、当初の TOEIC スコアの水準が

高い者ほどTOEICスコアの伸び幅は小さくなる。この点は、これまでに行ってきた分析や先行研究の指摘とも一致する。

他方で、1学期のTOEICスコアの水準をモデルに投入することで、モデル1ではSUP出席回数の係数が負の値であったものが正の値に変わり、統計的にも有意である。これは、各学生の当初のTOEICスコアの水準を統制したことで、SUPの履修がTOEICスコアの伸びを押し上げる効果を検出できるようになったためである。つまり、SUP履修はTOEICスコアを押し上げる効果があるものの、その伸び幅はTOEICスコアの水準が高いほど目減りするため、SUP履修者は当初からTOEICスコアが高い傾向にあることから伸びの数値が小さくなる。そのため単純な伸びの平均では、履修者の値の方が小さく考えられる。このように、一見するとSUPの履修がTOEICスコアの伸びに寄与していないように見えるが、各学生のTOEICスコアの水準との兼ね合いを考慮すれば、SUPはTOEICスコアを向上させていることがわかる。とはいえ、その効果が小さいことは確かであり、SUPの課題の1つだといえる。

TOEICスコアの伸びの大きさを昨年度と比較すると、平成26年度はSUPを最後まで履修した修了者でTOEICスコアの伸びの平均が58.8ポイントとなっており、今年度よりも大きい。しかし、昨年度の修了者における1学期のTOEICスコアの平均は493.0ポイント、2学期のTOEICスコアの平均が548.1ポイントと、いずれも今年度より低い。このことを考慮すれば、今年度のSUPの修了者は当初からTOEICスコアが高く、向上の余地が少なかったことも伸びが小さい要因の1つとして考えられる。SUPを修了した学生の数が増えているというわけでもないため、これは学年ごとのSUP参加者の特徴なのかもしれない。また、TOEICスコアの伸び幅は小さくとも、SUP修了者の2学期TOEICのスコアが高いということは、2年生以降の本格的なKGPにとっては好ましい状況であるともいえる。

モデル3では、モデル2に説明変数として所属学科を加えている。決定係数の向上が見られることから、所属学科の違いもTOEICスコアの伸び幅を左右しているようである。ここでは、TOEICスコアの水準が全体の平均値に近い文学部比較文化学科を基準に分析を行っているが、係数が統計的に有意な項目を見ると、比較文化学科と比べて外国語学部英米学科ではTOEICスコアの伸び幅が大きく、経済学部経営情報学科の伸び幅は小さいようである。なお、学科をモデルに投入しても

SUP 出席回数と 1 学期 TOEIC スコアの影響のあり方は変わらない。

モデル 4 は、モデル 2 に説明変数として SUP 講座のクラスのレベルを加えたものである。クラスのレベルの変数は SUP 履修者のみが有効な値を持つため、分析対象は履修者のみとなる。クラスのレベルは、履修者が最も多い初級クラスを基準に分析している。初級クラスは、よりレベルが低い基礎クラスよりも TOEIC スコアの伸び幅が大きく、中級クラスよりは小さいようである。上級クラスは係数の値は大きいものの、受講者数が少ないことから誤差が大きくなり、統計的に有意な差を見出すことができない。ここから、クラスのレベルは TOEIC スコアの伸びを左右していることがわかる。なお、モデル 4 でも出席回数や 1 学期 TOEIC スコアの影響は変わらない。

最後に、モデル 4 の説明変数に学科を加えたモデル 5 を確認する。出席回数や 1 学期 TOEIC の影響は、ここでも変わらない。クラスのレベルの影響も同様である。モデル 3 と比べると学科の影響の仕方は異なっているようであるが、分析対象が履修者のみになっているためだろう。

以上から、一見すると SUP は TOEIC スコアを向上させているようには見えないが、それぞれの学生の TOEIC スコアの水準が高いほど伸びが小さくなり、それを考慮して分析することで SUP が TOEIC スコアを向上させる効果を確認できた。また、所属学科や SUP クラスのレベルによっても TOEIC スコアの伸び幅が異なっていることも明らかになった。これまでの分析でも指摘してきたが、やはり SUP の効果を議論するためには、各個人の TOEIC スコアの水準なども考慮する必要があるといえる。しかし、TOEIC スコアの達成水準や伸び幅の数値そのものも、やはり重要ではある。この点は、2 年生以降の本格的な KGP の履修条件などとの関係で議論する必要がある。その意味では、SUP 修了者の TOEIC スコアの平均が、KGP の主要プログラムである Global Education Program における Global Studies Course の申請要件である 550 ポイントを上回っていることから、KGP の導入プログラムとして 2 年生以降のプログラムを履修する学生の TOEIC スコア水準を担保する役割は果たしているといえるだろう。

4. SUP からの離脱

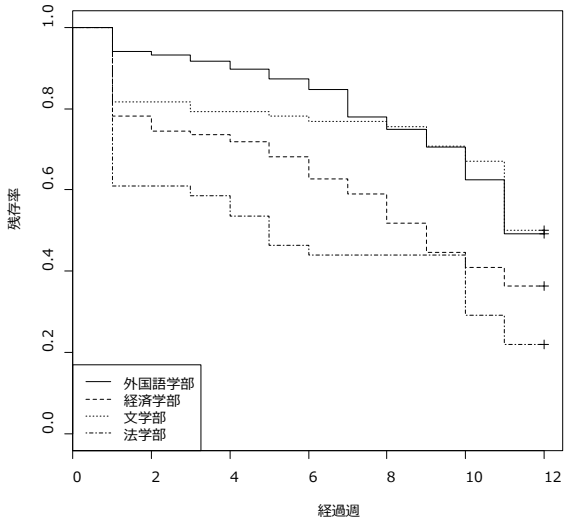
SUP の主な目的は、2 年生以降の本格的な KGP の履修に必要な英語力の基礎

を養成し、履修要件として設定されているTOEICスコアを達成することである。SUPの履修は、2年生以降のKGPの履修および修了に必須ではないが、実質的にはKGPの入り口となっており、SUPの履修者数が2年生からのプログラムの履修者数を大きく左右する。前述のように、SUPの開始段階では履修者が新入生の3割程度と比較的多く、相対的に学習意欲の高い学生を確保しているものの、最後まで受講せずに途中でプログラムから離脱していく者がかなり居ることが課題となっている。その大きな要因として、単位認定がなされないことや2年生以降のプログラムの履修および修了に必須ではないことなどが挙げられるが、それ以外の要因として、一度は関心を持って参加したSUPの受講を取りやめる、ないしは受講を続ける要因を、プログラムに対する学生の意識や態度から探る。

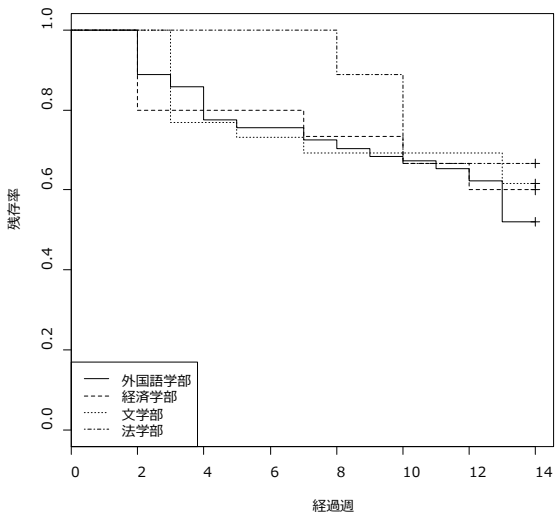
ここでは、平成26年度のSUPの分析（西出・永末, 2016）と同様に、SUPからの離脱というイベントについて、イベント・ヒストリー分析を用いて検討を進める。はじめに、1学期および2学期の時間の経過に伴うSUPからの離脱の状況⁸を、 Kaplan・マイナー法で推定した生存関数で示す⁹。図4は、SUPの「申請者」をリスクセットとして、1学期の生存関数を学部別に推定したものである。法学部の学生は1週目で大きく減少することから、参加申請をしたにも関わらずSUPの講座を受講しない者が多いことがうかがえる。全体的に見れば、時間の経過とともに徐々に受講者数が減少していくが、文学部については学期途中の離脱が他の学部よりも少ないように見える。図5は、2学期の学部別生存関数である。リスクセットは2学期に一度でも出席した履修者であるため、1週目の離脱者は存在しない。1学期の生存関数と比較すると、2学期の履修者は離脱が少ない傾向にあることがうかがえる。SUPの受講者は夏期休暇を経て大幅に減少するが、夏期休暇後に1度でもSUP講座に足を運んだ者は最後まで受講する傾向にあるようである。

⁸ SUPからの離脱イベントは、明示的に学生からの届け出などがあるわけではないため、出席状況から判断しイベントの発生タイミングを特定する必要がある。ここでは西出・永末（2016）の平成26年度のSUPの分析と同様の基準でイベント発生のタイミングを特定した。

⁹ イベント・ヒストリー分析の方法および参考文献については、平成26年度のSUPについて同様の分析を行った西出・永末（2016）を参照されたい。



【図 4】 1 学期の SUP 履修者の残存率



【図 5】 2 学期の SUP 履修者の残存率

これらを踏まえて、SUPからの離脱要因について検討していく。プログラムの受講を途中で取りやめた理由を探るためには、SUPからの離脱者に対する調査が必要であるが、一時的な欠席と離脱を区別することが難しいことや、既にプログラムから離れた者を追跡することは難しいため原因の追究は難しく、これまで十分に検討できていなかった。そこで、平成27年度は1学期の初回のSUP講座であらかじめ履修者全員を対象に履修目的やプログラムへの期待などについて調査を実施した。このデータを用いてSUPの受講を継続する、ないしは途中で離脱する学生の特徴を分析することで、SUPからの離脱要因を探っていく。

SUPからの離脱は1学期に多く、2学期の履修者は離脱しにくいことから、分析期間を1学期に絞り、SUPからの離脱イベントの発生についてイベント・ヒストリー分析の一種である離散時間ロジットモデルを用いて検討する¹⁰。離散時間ロジットモデルは、イベントが離散的な時間単位で観察されるデータに適している。具体的な分析方法は、一般的な1行が1人分のデータを表す「パーソンレベルデータ」を、1行が1つの時間単位を表す「パーソンピリオドデータ」に変換し、イベント発生の有無を目的変数としたロジスティック回帰分析となる。ここでは、SUPからの離脱イベントの発生を目的変数として、1学期のSUP講座の冒頭で実施した調査項目のうち、SUPへの参加理由、英語を勉強しようと思う理由、SUP講座に対する期待などを説明変数として、どのような変数がSUPからの離脱を左右しているのかを検討していく。

この調査は今年度初めて行うものであるため、SUPから離脱する理由に関する明確な仮説が存在したわけではなく、調査内容には幅広い項目が含まれている。したがって、分析でも明示的な仮説を検証するというよりも、これらの項目のうちどの変数がSUPからの離脱を左右するのかを探索的に分析しながら、SUPから離脱する理由にアプローチする。

はじめに、SUPへの参加理由について検討する。調査では、SUPに参加した理由として表6に示す15の項目を挙げ、あてはまるものを複数選択形式で選択してもらった。分析では、これらの項目と基底ハザード関数の近似として経過週を示すダミー変数を説明変数としてモデルに投入し、変数選択の手続きによって最も当て

¹⁰ 平成26年度のSUPの分析でも同様の分析を予備的に行っている。分析方法の詳細については、西出・永末(2016)を参照されたい。

はまりの良いモデルを探索した¹¹。その結果得られたモデルを表7に示す。

【表6】SUPに参加した理由

-
- a. TOEIC スコアを向上させるため
 - b. 留学や参加したいプログラムなどで必要な TOEIC スコア等を達成するため
 - c. 学部・学科の英語の授業だけでは足りないと思ったから
 - d. 英語をもっと勉強したいから
 - e. TOEIC テスト受験料の補助金がもらえるから
 - f. 英語を話せるようになりたいから
 - g. 周りの友人が受講するから
 - h. 英語ぐらいできないと恥ずかしいから
 - i. 2年生からのグローバル人材育成プログラムに参加するため
 - j. ポスターやチラシ、オリエンテーションで興味を持ったから
 - k. 将来やりたい仕事のために英語が必要だから
 - l. 講座の内容が面白そうだったから
 - m. グローバル人材育成に興味があったから
 - n. 自分の可能性が広がると思ったから
 - o. 大学で何か新しいことに挑戦したかったから
-

【表7】SUPに参加した理由を説明変数とする離散時間ロジットモデル

	B	標準誤差	exp(B)
経過週 (Ref. 第4週)			
第1週	-0.850	0.500	0.428+
第2週	-1.241	0.577	0.289*
第3週	-0.661	0.476	0.516
第5週	0.047	0.401	1.048
第6週	0.435	0.373	1.545
第7週	0.074	0.409	1.076
第8週	0.553	0.374	1.738
第9週	1.155	0.345	3.173**
第10週	1.878	0.328	6.542**
第11週	-15.347	484.861	0.000

SUP 講座に参加した理由			
e. TOEIC テスト受験料の補助金がもらえるから	-0.262	0.164	0.769
i. 2年生からのグローバル人材育成プログラムに参加するため	-0.356	0.191	0.701+
疑似 R ² (McFadden)	0.111		
N	3199		

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

¹¹ ここでは明確に仮説を設定せず探索的に影響のある変数を検討するために、変数選択を行った。分析には R 言語の glm 関数を用い、変数増減法によって AIC の値が最も小さくなるモデルを選択した。機械的な変数選択の結果が、必ずしも妥当なモデルであるとは限らないが、影響の強い変数を探る手がかりにはなるだろう。変数選択の結果、モデルに含まれるが係数が有意ではない項目もある。このような変数の解釈には注意を要するが、ここでは有意な影響とまではいえないが、何らかの影響がみられる可能性があるものとしてとらえておく。

先述のとおり、分析結果はSUPからの離脱の有無を目的変数としたロジスティック回帰となる。経過週の影響を見ると、基準となる第4週に対して、第1週、第2週と序盤は離脱するリスクが低いことがうかがえる。1年生の1学期であることを考えれば、当然の結果だといえるだろう。他方で、後半の第9週、第10週では離脱のリスクが高くなっている。これは、TOEICの受験が済んだことや、SUP履修者を対象に実施しているTOEIC受験料の補助を受給するために必要な出席回数を満たした段階で出席をやめることなどが考えられる。

SUPに参加した理由を見ると、変数選択の結果としてモデルに残っているのが、「TOEIC受験料の補助金」と「2年生からのプログラムに参加するため」である。係数の検定結果を見ると、前者は10%水準でも有意ではないが、変数選択でモデルに影響を及ぼす変数として残ったものであることから、弱いながらも影響があるものと考えられる。いずれの変数も偏回帰係数が負の値であることから、SUPからの離脱リスクを押し下げていることがうかがえる。TOEIC受験料の補助を得ること、および2年生以降の本格的なKGPへの参加希望、特に後者を当初からのSUPへの参加動機として持っている学生ほど、SUPを途中で離脱しにくいようである。TOEIC受験料の補助は、ある程度有効であることが確認できる。また、2年生以降のKGPの履修という明確な目的を持つことが、SUPの受講を継続させる要因であることもうかがえる。

同様の方法で、次に英語を勉強しようと思う理由の影響を検討する。調査では、英語を勉強しようと思う理由として表8に示す20項目を挙げ、それぞれについて「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で回答してもらった。これを説明変数としてモデルに投入し、変数選択を行った結果得られた最も当てはまりの良いモデルを表9に示す。

経過週の影響は、先ほどの分析と変わらない。英語を勉強しようと思う理由としてモデルに残った項目を見ると、「英語のニュースなどを理解したいから」「英語力向上を実感すると嬉しい」が有意に負の影響を及ぼしており、残りの2項目は個別には有意ではないがモデルに対しては影響のある変数のようである。影響の方向を見ると、英語のニュースや映画を理解したい、英語力向上の実感が嬉しい、英語ができることで有能さを示せるなど、英語学習そのものに関心があり目的化している傾向があると、SUPから離脱しにくいようである。他方で、有意ではないものの、「外国人とコミュニケーションがとりたい」という項目がモデルに残っており、離脱の

【表 8】英語を勉強しようと思う理由

-
- a. 将来の就職に役立つから
 - b. 資格をとるため
 - c. 海外旅行のため
 - d. インターネットで英語のページを見たいから
 - e. 外国人に英語が通じるとうれしいから
 - f. 英語のニュースや映画、音楽、小説などを理解したいから
 - g. 英語ができると世界に視野が広がるから
 - h. 外国人とコミュニケーションをとりたいから
 - i. 英語を勉強するのが好きで楽しいから
 - j. 英語ができるとかっこいいから
 - k. 留学するため
 - l. 将来の目標のために必要だから
 - m. 現在のグローバル社会では必須だと思うから
 - n. TOEIC や英検などで高いスコアをとるため
 - o. 英語が話せることにあこがれがあるから
 - p. なんとなくやっている
 - q. よい職業に就くためには英語が必要だから
 - r. 英語ができると自分の可能性が広がると思うから
 - s. 英語ができると有能であることを示せるから
 - t. 英語力が向上しているのを実感すると嬉しいから
-

【表 9】英語を勉強しようと思う理由を説明変数とする離散時間ロジットモデル

	B	標準誤差	exp(B)
経過週 (Ref. 第 4 週)			
第 1 週	-0.867	0.501	0.420 +
第 2 週	-1.246	0.578	0.288 *
第 3 週	-0.821	0.501	0.440
第 5 週	0.052	0.402	1.053
第 6 週	0.387	0.379	1.473
第 7 週	0.084	0.410	1.088
第 8 週	0.437	0.384	1.548
第 9 週	1.091	0.351	2.978 **
第 10 週	1.824	0.332	6.196 **
第 11 週	-15.368	495.482	0.000
英語を勉強しようと思う理由			
f. 英語のニュースや映画、音楽、小説などを理解したいから	-0.191	0.089	0.826 *
h. 外国人とコミュニケーションをとりたいから	0.205	0.129	1.228
s. 英語ができると有能であることを示せるから	-0.119	0.075	0.887
t. 英語力が向上しているのを実感すると嬉しいから	-0.171	0.098	0.842 +
疑似 R ² (McFadden)	0.115		
N	3027		

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

リスクを高める方向に影響を及ぼしている可能性がある。外国人とコミュニケーションをとりたいという実践的な目的をもって英語を学ぼうとしている者は、SUPから離脱しやすい傾向があるのかもしれない。現状のSUPの内容はTOEIC対策が中心であり、必ずしも実践的な内容とはいえない。そのため、英語学習そのものに関心がある者は受講が続けられるが、より実践的な英語の習得を求める者にとっては学習の動機を維持できず離脱しやすくなるということだろうか。

引き続き、SUP講座に対する期待のあり方について検討する。SUP講座に対する期待については、表10に示す15項目についてそれぞれ「期待する」から「期待しない」までの5段階で回答してもらった。先ほどと同様にこれらの変数をモデルに投入し、変数選択によって最も当てはまりの良いモデルを探索して得られた結果を表11に示す。

ここでも経過週の影響は同様である。変数選択の結果、SUP講座に対する期待の項目のうち4つの項目が残っている。SUPからの離脱リスクを押し下げているのは、「海外で働くための英語力の基礎を身につける」「個別の指導や相談ができる」の2項目で、検定の結果はいずれも統計的に有意である。他方で、「実践的で実用的な英会話が身につく」「外国と関わり、英語を使った仕事をするための英語力を身につける」の2項目は離脱リスクを押し上げる方向に影響をおよぼすようである。ただし、後者はモデルには含まれるが統計的に有意ではない。SUPに対して、

【表10】 SUP 講座に対する期待

-
- a. 英語が話せるようになること
 - b. 英語の映画や音楽、小説などが理解できるようになること
 - c. 文法など正確な英語を身につけられること
 - d. 英語のドラマや映画、ニュースなどを使った授業内容
 - e. 留学するために必要な英語力の基礎を身につけられること
 - f. 海外で働くために必要な英語力の基礎を身につけられること
 - g. 外国と関わったり、英語を使った仕事をするための英語力を身につけられること
 - h. TOEIC や TOEFL などの試験でスコアを伸ばすこと
 - i. 学部や学科の英語の授業よりも、より実践的で実用的な英会話が身につくこと
 - j. 学部や学科の英語の授業よりも、より実践的で実用的なビジネス英語が身につくこと
 - k. 英語だけでなく、外国の文化や歴史について学べること
 - l. 授業でネイティブスピーカーとの会話できること
 - m. 英語力だけではなくグローバルに活躍するための知識やスキルを身につけられること
 - n. グループワークなどを取り入れた授業内容
 - o. 個人の英語力や課題に応じた個別の指導や相談ができること
-

【表 11】 SUP 講座に対する期待を説明変数とする離散時間ロジットモデル

	B	標準誤差	exp(B)
経過週 (Ref. 第 4 週)			
第 1 週	-0.859	0.500	0.424+
第 2 週	-1.248	0.578	0.287*
第 3 週	-0.665	0.476	0.514
第 5 週	-0.035	0.409	0.965
第 6 週	0.442	0.374	1.556
第 7 週	0.084	0.410	1.088
第 8 週	0.513	0.379	1.670
第 9 週	1.100	0.350	3.005**
第 10 週	1.905	0.329	6.720**
第 11 週	-15.344	489.027	0.000

SUP 講座に対する期待			
f. 海外で働くために必要な英語力の基礎を身につけられること	-0.240	0.126	0.787+
g. 外国に関わったり、英語を使った仕事をするための英語力を身につけられること	0.225	0.146	1.252
i. 学部や学科の英語の授業よりも、より実践的で実用的な英会話 が身につくこと	0.243	0.111	1.275*
o. 個人の英語力や課題に応じた個別の指導や相談ができること	-0.249	0.098	0.779*
疑似 R ² (McFadden)	0.116		
N	3124		

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

より実践的な英語の学習を期待する者は離脱しやすいようである。現状の SUP が TOEIC 対策を中心とすることを考えれば、英語学習そのものに関心の高い者の期待にはある程度応えられているようである。しかし、実践的な英語を学びたい者にとっては期待とは異なる内容であったために、途中で離脱してしまうということだろう。

以上の分析はかなり探索的に進めてきたが、SUP に参加した理由や期待、英語学習の理由のそれぞれの項目が SUP からの離脱リスクに及ぼす影響から、SUP から離脱しやすい学生の特徴の一端が漠然と見えてきた。総じていえば、TOEIC 受験料の補助や 2 年生からの KGP への参加希望、英語学習そのものへの関心など、SUP の内容とマッチした目的意識を持つ学生が SUP から離脱しにくい傾向にあるといえそうである。他方で、外国人とコミュニケーションをとりたい、実践的で実用的な英語を身につけたいといった、いわば「使える英語」を身につけたいと考えている者は SUP から離脱しやすい。こうした目的や期待には、現状の SUP ではあまり対応していないことから、離脱しやすくなると考えられる。また、英語学習には地道な努力と時間が必要であることを踏まえれば、実践的な英語を身につけると

いった目的や期待は、見方を変えればやや即物的で漠然としているといえるかもしれない。だとすれば、こうした期待がSUPの内容とのズレも相まって、SUPから離脱しやすくしているとも考えられる。

最後に、離脱者が最も多い1学期から2学期の継続性について若干の検討を行う。ここでは、1学期のSUPで実施した調査を用いて分析する。調査対象は1学期のSUPを最後まで受講した者が中心で、どのような学生が1学期のSUPを最後まで受講したにも関わらず2学期のSUPを受講しないのかを、2学期のSUPの履修有無を目的変数としたロジスティック回帰分析から探る。ここでは、モデルに統制変数として性別と学科を投入し、これらに加えて1学期のSUPへの満足度や難易度、手応え、英語学習への取り組み、KGPへの参加希望やイメージ、1学期のTOEICスコアを加え、統制変数を固定したうえで変数選択を行い最も当てはまりの良いモデルを探った(表12)。

【表12】2学期のSUPの履修を左右する要因(ロジスティック回帰分析)

	B	標準誤差	exp(B)
性別(男性ダミー)	-1.019	0.431	0.361*
学科(Ref. 比較文化学科)			
英米学科	0.952	0.622	2.590
中国学科	2.503	0.930	12.222**
国際関係学科	1.486	0.502	4.418**
経済学科	1.372	0.810	3.943+
経営情報学科	0.683	0.637	1.980
人間関係学科	3.798	1.354	44.608**
法律学科	0.908	0.836	2.478
政策科学科	-13.478	882.744	0.000
1学期のTOEICスコア	0.007	0.002	1.007**
グローバル人材に向けて英語以外で学びたいことがあるか	-0.309	0.208	0.734
2年生からのKGPへの参加希望	0.638	0.251	1.893*
KGPが自分の将来の進路に役立つか	0.444	0.253	1.558+
疑似R ² (McFadden)	0.244		
N	209		

※ p<0.01: **, p<0.05: *, p<0.10: +

統制変数として投入した学部や性別は、いずれも有意な影響があるようである。変数選択を経てモデルに残った項目を確認すると、まず1学期のTOEICスコアが有意な影響をおよぼすことがわかる。係数が正であることから、TOEICスコアが高いほど2学期SUPを受講する傾向にあることがうかがえる。次に有意な影響が

ある変数を見ると、2年生以降のプログラムへの参加希望がある者、KGPが将来の自分の進路に役立つと考える者ほど2学期も続けて受講する傾向にあるようである。KGPのプログラムに対して明確な目的意識やメリットを感じる者が2学期のSUPも続けて受講するということだろう。裏を返せば、1学期のSUPで2年生以降のプログラムへの関心や履修の希望を持たなければ、そこでグローバル人材育成プログラムから離脱するともいえる。したがって、1学期のSUPでの動機付けが2学期のSUPおよび2年生以降のKGPの参加にとって重要であるといえる。

検定の結果は有意ではないが、「グローバル人材育成に向けて英語以外に学びたいことがある」という項目がモデルに残っている。係数の符号から判断すると、英語以外の内容を学びたいと考えている学生が、2学期のSUPを履修しない傾向にある可能性は気になる点である。グローバル人材に向けて英語以外の内容を学びたいということが英語が中心となるSUPからの離脱を促すが、2年生以降の本格的な内容をともなうグローバル人材育成プログラムへの参加につながるならば、2学期のSUPを履修しないことはさほど問題ではない。しかし、2学期のSUPを履修しないことで2年生以降のプログラムにも参加しなくなっているとすれば問題である。この点は、現状のSUPが英語にかなり焦点を当てているがために、学生のグローバル人材育成における内容的な関心にうまく対応できていないことを示唆しているといえるかもしれない。SUPの内容や位置づけを検討する際には、学生のこうした希望にも留意しなければならないだろう。

本節では、時系列のSUPの履修状況、特にプログラムからの離脱に注目して分析を進めてきた。SUPの開始当初には、単位認定もなくその後のKGPの要件ともならないにも関わらず、新入生の約3割と量的には十分な参加者数を確保できており、加えて大学での学習意欲が相対的に高い学生を集めることにも成功している。しかし、SUPを最後まで受講するのは当初の4分の1にも満たず、多くの学生が途中で離脱してしまっている。この離脱者の多さがSUPの大きな課題である。ここでは、この離脱の原因について探索的に分析を進め、断片的な知見ではあるがいくつかの手がかりを得ることができた。

簡単に整理すると、SUPも含めてKGPは「英語のプログラム」という印象が強く、英語学習に対する意欲とSUPの内容との関係によって履修の姿勢が左右される。ここでの分析から、SUPからの離脱につながる要因の1つとして、「実践的な英語」に対する期待があることが見えてきた。実践的な英語への期待に対して、SUPの

内容はTOEIC対策に軸足を置いているため、そのような内容を期待した者は途中で受講をやめてしまうようである。期待と実際の内容にズレがあるために受講をやめるとすれば、現状のSUPの位置づけや内容について適切に周知するか、内容を「実践的な英語」などのニーズに応じて変更することなどが、対応として考えられるだろう。いずれを選択するのは、KGPのグローバル人材育成が目指す人材像や方向性の問題である。とはいえ、SUPやKGPの内容が適切に学生に伝わっていない部分があると考えられることから、いずれにしても内容の周知が重要であることは間違いない。特に、SUPは入学直後に開始されることからイメージが先行してしまう可能性があり、短い期間でいかに内容を適切に伝えるのが重要になるだろう。

これまでSUPの履修状況、とくに途中で受講をやめてしまう原因に関する分析は不十分であったが、これらの分析によってわずかに手がかりを得ることができた。しかし、プログラムの改善や今後のKGPの展開を議論するには未だ不十分である。ここで得られた知見を踏まえ、引き続き調査と分析を継続していく必要があるだろう。

5. むすびにかえて —Start Up Programの課題と今後の改善に向けて—

本稿では、北九州市立大学におけるグローバル人材育成プログラムの1年生向けプログラムであるStart Up Program (SUP)の平成27年度における成果や課題について分析した。SUPについては、平成26年度、平成25年度についても分析してきたが、これまではTOEICスコアの分析が中心であり、参加者の特徴や、課題となっていたプログラムを途中で離脱してしまう要因などについては、データの不足などから検討ができていなかった。これらの点について、ここでは探索的な段階ではあるが学生の意識や態度を中心に分析を行い、一定の傾向や手がかりをつかむことができた。

分析結果の主要な点を簡単にまとめておくと、まず「外国語」に関心を持っている学生ほど、SUPないしはグローバル人材育成プログラムに参加する傾向にあることがわかった。内容的なところでいえば、国際社会やグローバルなビジネスなどに関心のある者、グローバル化が自分自身と関係したものであると考えている者ほど参加しやすい。これらのことから、KGPは、まず「英語のプログラム」として捉えられており、その中でも国際社会やビジネスを学ぶプログラムであると考えら

れているようである。英語そのものだけに焦点を当てたプログラムではないため、英語に関心が集中しすぎることはやや問題かもしれないが、KGP が打ち出す内容に関心を持つ学生が参加する傾向にあり、入学したばかりの1年生には比較的うまく KGP の内容が伝わっているといえるだろう。また、学習意欲の面でも相対的に主体的で意欲の高い学生を集めることに成功している。

入り口の段階で量的にも質的にも学生の募集には成功している一方で、参加した学生の多くがプログラムの途中で離脱している点が SUP の課題となっている。時間の経過に伴うプログラムからの離脱は1学期中に比較的多く、夏季休暇で大幅に履修者が減少するが、2学期に履修した学生は最後まで継続する傾向にある。プログラムの途中で離脱する要因について、参加当初の SUP に対する期待や英語学習目的、興味関心などから検討すると、TOEIC 受験料の補助や2年生からのプログラムに参加するといった、どのような形であれ明確な目的意識がある学生や英語学習そのものが目的化している学生は途中で離脱しにくい傾向があるが、実践的・実用的な英語が学べることを期待している学生は離脱しやすいことが見えてきた。SUP の内容が期待やイメージと一致しなければ途中で離脱する傾向にあるが、離脱者数が当初の履修者の4分の3にのぼることを考えれば、SUP 自体の内容や KGP における位置づけは、学生に対して適切に伝わっていない可能性がある。つまり、KGP 全体のコンセプトと履修学生の興味・関心は概ね一致しているが、そこでの SUP の位置づけがうまく伝わっておらず、本格的なプログラムを履修する前の段階で学生を逃がしてしまっているのではないだろうか。これが SUP の履修状況から見える KGP の課題である。

SUP の目的である TOEIC スコアの向上については、単純に数値だけを見ると、1学期から2学期にかけてのスコアそのものの伸び幅は、SUP 非履修者よりも SUP 履修者のほうがむしろ小さい。しかし、TOEIC スコアの水準によって伸び幅が左右されることを踏まえ、各学生の初期の TOEIC スコア水準を統制して SUP の効果を検討すると、SUP にきちんと出席している者ほどスコアが伸びていることは確認できる。その意味では、SUP は TOEIC スコアを向上させる効果が確かにある。しかし、伸び幅そのものが小さいことや、そもそも最後まで受講する学生が当初から TOEIC スコアが高い者に偏る傾向は、SUP の設置目的に鑑みれば大きな問題点である。すなわち、履修要件を満たしていない学生の TOEIC スコアを引き上げ、本格的なグローバル人材育成プログラムの参加に結びつけるという役割が十分に機

能していないといえる。

以上の分析結果を踏まえてSUPの課題を端的に整理すると、一連のKGPのなかでSUPに期待される役割や位置づけと実際にSUPが提供している講座の内容との間の乖離、という点を指摘できる。現状のSUPの内容は、ある意味ではTOEIC対策講座であるにも関わらず、他方でKGPの入り口にあるプログラムとしては、2年生以降の本格的なプログラムへの導入的役割が期待されている。これまでの分析でも見たように、2年生からのプログラムを履修したいといった明確な目的意識があれば、TOEIC対策が中心のSUPでも受講を継続する傾向がある。これは、SUPの講座で取り組んでいるTOEICの学習が、目的と対応して動機づけられているためだろう。しかし、そうした目的が十分に位置づけられない学生は、TOEICの学習をする意味が曖昧になり、動機を維持できずにSUPから途中で離脱してしまうのだろう。

したがって、SUPではTOEIC対策に加え、TOEICの学習を2年生からのプログラムと関連付けて動機づけていく工夫と改善が求められているといえる。だが、この動機づけが最も難しい課題であり、SUPのみならずKGP全体にもあてはまる重要な改革課題である。分析によって得られた知見から改革の手がかりの1つを示すとすれば、離脱する学生がSUPに期待するものとして挙げている「実践的・実用的」な英語、というキーワードである。実践的な英語としてどのようなものが期待されているのかはともかく、そうした要素を取り入れつつ以降のKGPと関連付けながら学習を動機づけるようなプログラムの構造を検討することが、1つの改革の方向として考えられるだろう。

加えて、KGPの終了要件としては一定の水準を保つとしても、入り口の段階での履修要件としてのTOEICスコア基準を引き下げることが検討する必要があるかもしれない。グローバル人材育成の内容にたどり着く前の段階で学習動機を失っているとすれば、1年生の段階ではTOEICスコアよりもKGPの魅力や学習の動機づけに重点を置き、履修要件のTOEICスコア基準を緩和することも検討すべきだろう。その場合、TOEICスコアが低い水準で履修した学生がプログラムの内容についていけないといったことや、授業運営に問題が生じること、要件を満たせずプログラムを修了できないといった懸念もある。しかし、一歩踏み出してSUPに参加した学生を入り口の手前で離脱させてしまうよりは、例えば修了できないとしてもプログラムに参加できるチャンスを広げる方が教育的には好ましいかもしれな

い。この点は、プログラムの理念と教育方針の問題である。

以上のように、本稿では様々なデータを用いて SUP の成果や課題について分析し、それらを踏まえて最後に SUP および KGP の改善の方向について若干の議論を行った。プログラムの改善や改革のためには乗り越えるべき課題も多いが、本稿ではデータに基づいてその手がかりの一端は示せたと思う。文部科学省の補助事業としての KGP は平成 28 年度で一段落するため、その後の展開に向けた成果の検証とプログラムの改革や再構築が求められるだろう。そのためにはここで詳細に検討した SUP をはじめ、その他のプログラムについても引き続きデータの収集を行い、成果や課題の検証を行うことが必要である。

参考文献

- 磯田貴道・田頭憲二（2011）「授業外での英語学習の効果 —TOEIC スコアの変化から—」『広島外国語教育研究』（14号）、広島大学外国語教育研究センター、47-59 頁。
- 土肥充（2006）「TOEIC IP による千葉大生の英語力の現状分析」『人文と教育』（2）、千葉大学国際教育開発センター、15-29 頁。
- 土肥充・柳瀬弘美（2009）「千葉大学における TOEIC IP スコアの包括的分析」『言語文化論叢』（No.3）、千葉大学言語教育センター、31-45 頁。
- 西出崇・永末康介（2015）「Kitakyushu Global Pioneers における Start Up Program の成果と課題 —平成 25 年度入学生のデータから—」『基盤教育センター紀要』（第 21 号）、北九州市立大学基盤教育センター、37-53 頁。
- 西出崇・永末康介（2016）「北九州市立大学におけるグローバル人材育成事業の現状と課題 —平成 26 年度入学生のプログラム参加状況および TOEIC スコアの分析—」『基盤教育センター紀要』（第 24 号）、北九州市立大学基盤教育センター、15-41 頁。
- 西出崇・山崎美美子・浅羽修文（2015）「大学進学動機にみる北九州市立大学の新生の特徴」『基盤教育センター紀要』（第 23 号）、北九州市立大学基盤教育センター、49-66 頁。